



2012年8月8日放送

漢方頻用処方解説 桂枝湯

千葉大学大学院 医学研究院 和漢診療学講座 平崎 能郎

今回は桂枝湯について、お話をさせていただきます。

1 桂枝湯の主な効能

桂枝湯の主な効能は、風邪や急性熱性疾患の初期、脈が浮いていて自汗傾向があり、寒気を伴う場合に使います。

2 処方の出典・由来

およそ西暦200年頃に、張仲景という名医の書いたとされる『傷寒論』が出典で、君薬である桂枝から名前を取って桂枝湯と名付けられました。また、陽の始まりという意味で、陽旦湯という別名もあります。

3 構成生薬の漢方的解説

この桂枝湯を構成する生薬は、原典の『傷寒論』には、桂枝、芍薬、甘草、生姜、大枣と記載されています。

まず、君薬の桂皮ですが、クスノキ科の常緑高木のケイ、*Cinnamomum cassia*の若い枝のことを指しますが、現代の日本では、実際の臨床では精油成分の含有量の多いケイの樹皮である桂皮を使っていることが多いです。これは早くは『神農本草経』で牡桂と書かれている生薬で、「味辛温、無毒。上気咳逆、結気、喉痺、吐嘔を治し、関節を利し、中を補

い気を益す」と記載され、気逆や咳嗽、咽のつまり、嘔吐、関節病、気虚を治す生薬であるとのこと。

この桂枝には気を発散させて末梢に巡らす作用、正常な経路の気を引き上げる作用があり、生体の上の方向や外方向に薬効が働く作用があります。一般に桂枝湯における陽の役割をこの桂皮が担っていると言えます。

次に臣薬である芍薬ですが、ボタン科の多年草、芍薬の根を乾燥したものです。やはり『神農本草経』に収載された生薬で、「邪気腹痛を治し、血痺を除き、堅積寒熱疝瘕を破り、痛みを止め、小便を利し、気を益す」と記載されています。一般に補血薬、補陰薬として知られています。この芍薬の薬性は薬効を生体の下方や内方に向ける働きがあります。桂枝湯においては、桂枝が陽の働きをしているのに対し、芍薬は陰の働きをしていると言えます。この桂枝の陽の働きと芍薬の陰の働きが、まさしく車でいうところのアクセルとブレーキのようになって、桂枝湯が多種多様な病態において多面的な薬能を発揮する原動力となります。

佐使薬である甘草・大棗・生姜はいわば胃薬であって、桂枝と芍薬がうまく働くのを補助しています。

4 古医書における記載

まずは原典の『傷寒論』での記載です。太陽病上篇に、「太陽中風、陽浮にして陰弱、陽浮なるは、熱自ら發し、陰弱なるは、汗自ら出ず。嗇嗇として惡寒し、淅淅として惡風し、翕翕として發熱し、鼻鳴して乾嘔するは、桂枝湯之を主る」と記載されています。

この条文は感染症の初起において桂枝湯を用いる根拠となっています。また服用後には熱くて薄いお粥を食べて、桂枝湯の温熱性の薬力を助け、またまわりを温かくして、肌がしっかりと軽く汗ばむようにするとよい、というような指示も書かれています。

次に同じ上篇に、「太陽病之を下して後、その気上衝する者は桂枝湯をあたふべし」との記載があります。これは所謂、気逆という病態でこの桂枝湯を用いることを示しています。頭痛に桂枝湯や桂枝含有方剤が使われるのは、この条文が根拠となっています。桂枝は正常な経路で気を上の方向に引き上げる事が一般的に知られていますが、同時に異常な経路で上衝して来た気逆を治すという、一件相反する作用があることをわれわれは文献的に考察した事があります。

3つ目の代表的な条文ですが、太陽病中篇には、「病常に自汗出ざる者は此れ榮氣和すと為し、榮氣和する者は外はととのわず、衛氣は、榮氣と供に諧和せざるを以ての故に爾り。榮は脉中をめぐる、衛は脉外をめぐるをもってす。復た其汗を發し、榮衛和すれば則ち愈ゆ、桂枝湯によろし」と記載されています。この条文に代表される病態の事を営衛不和証と言います。脈外を行く陽気である衛氣と脈中を行く陰血である營氣のバランスが崩れた状態を指します。具体的には自汗傾向のある気虚の状態を指し、その他易感染、不眠、水腫、麻痺などの様々な病態でこの営衛不和証がみられます。桂枝湯やその類方である小建中湯や黄耆建中湯が、小児の虚弱体質や大人の慢性疾患に、体質改善を目的に用いられる根拠となっています。

5 桂枝湯の方意

現代においては、風邪などに対して臨床家は頻用している処方なのですが、実際の加減していない純然たる桂枝湯の症例報告は少ないようです。学術的な臨床報告は少ないのですが、この処方は『傷寒論』の処方の構成を理解する上で、もっとも基本的で重要な処方になります。桂枝湯の方意を理解できてはじめて、融通無碍な処方運用ができるようになりますと言えます。漢方初学者も、熟練者も、折に触れて立ち返るべき処方と思われれます。

6 薬理作用（基礎実験報告）

日本や欧米の論文では、多成分系の評価が低いため、桂枝湯の処方単位での薬理的な報告は少ないのですが、中国では医学雑誌に多数の動物実験の報告がなされています。

代表例を挙げます。Cheng らの報告では、マウスの後頸部に酵母を注射した動物発熱モデルで、桂枝湯投与により用量依存的に発熱は軽減し、血清 IL-1、TNF α 値、血漿中と視床下部の PGE₂ 値も用量依存的に減少するという結果が出ています。

また、Zhao らの報告によると、マウスの肺のマクロファージの細胞株において、桂枝湯を培養液に加えると、MyD88 を介したシグナルをブロックし、TLR3 の発現が低下するという結果が出ています。さらに、Zhou らの報告によると、ラットアジュバント関節炎モデルにおいて、桂枝湯投与により関節の急性浮腫を抑制し、関節液中の IL-1 β 、TNF α の活性や PGE₂ の産生を抑えるという結果が出ています。このように、消炎作用の報告が多いようです。

7 適応のポイント

一般に体力の低下した人で、腹直筋が張っていて、脈が弱い、自汗傾向があって寒がり、こういった方に有効な事が多いです。

8 類方鑑別

感染症や感冒の初期には、桂枝湯の鑑別として、脈の緊張が強く発汗傾向が見られない場合は麻黄湯。肩がこり、脈の緊張がやや強い場合には葛根湯。手足の冷えが強く、水様性鼻汁がある場合には浮脈であれば小青竜湯、沈脈であれば麻黄附子細辛湯。ごく軽度の感冒で発熱症状がない場合には香蘇散などが挙げられます。

桂枝湯は「衆方の祖」とも呼ばれ、様々な処方の基本骨格を形成します。桂枝湯を含有する方剤としては、桂枝加朮附湯、葛根湯、桂枝加芍薬湯、桂枝加芍薬大黄湯、桂枝加竜骨牡蛎湯、小建中湯、当帰建中湯、黄耆建中湯、当帰四逆加呉茱萸生姜湯、五積散などがあります。これらの処方はすべて桂枝湯証を構成する症状を含む病態に用いられる処方と言えます。

また、桂枝湯から芍薬を除くと胸の症状に効果のある処方がありますが、桂枝去芍薬湯を骨格とする処方には、炙甘草湯などが挙げられます。胸腹部痛に用いられる当帰湯は、桂枝湯の芍薬を増量した桂枝加芍薬湯と大建中湯を合方した、中建中湯に近い生薬構成と

なっています。

9 自験例

この桂枝湯は、わが家では常備薬になっており、子供が風邪を引いたときは、まずこの薬を試します。特に食欲不振などの症状が主体の感冒の初期にこの薬を飲ませると、すぐに症状が改善し、ご飯を良く食べるようになります。

以上、桂枝湯は多くの方剤を理解する上で基本となる処方なので、古典での記載を中心に解説させていただきました。